

新見市の企業と倉敷市在住のガラス作家が協力して、廃棄された太陽光パネルからガラス作品を生み出す取り組みを行っています。記事を読み質問に答えましょう。

# 太陽光パネルをガラスに



太陽光パネルから回収したガラス(右)で作したグラス

リサイクルを手がけるのは新見ソーラーカンパニー(新見市下熊谷)。本業は太陽光発電システムの開発・販売だが、佐久本秀行社長(47)が再利用策を研究して独自技術を生み出した。太陽電池やガラス、樹脂シートなどが貼り合わされ、分別が難しいパネルを高温の水蒸気で熱分解し、有価物を回収する。2021年に特許を取得し、普及を目指している。

**再資源化技術強み 新見の企業 倉敷のガラス作家 水口さん**

透過通り、手になじむ丸いグラス。廃棄された太陽光パネルから回収したガラスで作られている。太陽光発電の普及に伴って将来的な増加が懸念されている廃棄パネルを使い、新見市の企業と倉敷市在住のガラス作家が協力して始めた資源活用の取り組みだ。(伊東圭一)

## 廃棄増見据え新たな価値



パネルから回収したガラスで制作する水口さん(左)を見守る佐久本社長

回収した原料の約7割を占めるガラスを使って新たな用途が開拓できないか。佐久本社長が目をつけたのが工芸品だった。22年9月、面識がないまま、ホームページで見つけた倉敷市広江に工房を構える作家水口智貴さん(41)に依頼。「ガラスに関する情報は普段から収集している。廃棄パネル問題にも関心があった」という水口さんが快諾した。

水口さんは、大ヒット映画「テルマエ・ロマエ」の小道具を制作したほか、岡山県美術展覧会などで多数の受賞歴も持つ。同社が持ち込んだ粒状の再生ガラスを溶かすなどして調べ、「工芸用より粘度が高く固まるのが早い」「透明度や強度は十分

と分析。特性を考慮しながら約30個のグラスを作った。グラスは口径約7センチ、高さ約8センチ。少し気泡が残り、かすかな緑色を帯びている。水口さんは「環境問題へのメッセージ性もあり面白い素材。ランプシェードなども作れそう」と話す。

第1弾は同社がPR用として関係者に配布しているが、今後は自社でシリーズ化しての販売も視野に入れている。

佐久本社長は「自社技術で工芸品に使える水準のガラスを回収できると証明できた。廃棄されたものに新たな価値を与える『アップサイクル』に貢献していきたい」と意気込む。

**太陽光パネルの廃棄問題** 再生エネルギー普及を目指す国の方針を受け、日本では2012年以降、太陽光発電が急速に普及し、大規模発電所も各地に整備された。パネルの寿命は25～30年の



ため、環境省の推計では18年に年間約4400トンのパネルの廃棄量は、30年代後半には同50万～80万トンに増える見通し。効率的なリサイクルが課題となっている。

3日付山陽新聞、社会面

**Q1** 新見の企業は廃棄パネルを再資源化する技術を開発しました。廃棄パネルから回収されるガラスは、どれくらいの割合を占めるでしょうか。第3段落を読み答えましょう。

**Q2** 太陽光パネルの寿命は25～30年。環境省の推計で2018年には年間約4400トンが廃棄されています。2030年代後半には廃棄量はどれほどになる見通しですか。

**Q3** この取り組みを通じて、目指していることは何ですか。最後の段落の言葉を用いて答えましょう。

過去の問題は  
 こちらから▶▶